

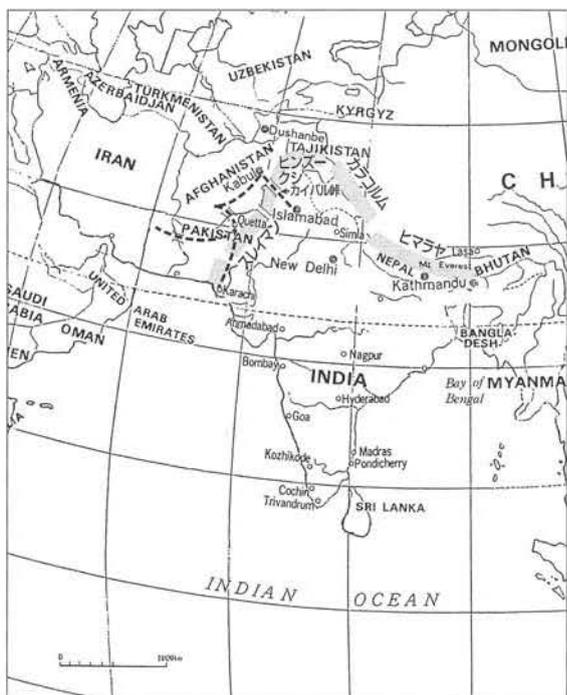
## 独断砂防国際協力序説～その2

渡辺正幸\*

パシュトン族の男がもつライフルは第2次世界大戦で米軍が用いたような精巧なものではないが、日本帝國陸軍が用いた38式歩兵銃のような弾込め式でもなく、連射できるものである。しかし周辺は狩の対象になるような動物がいる環境ではないから、とくに用途はなく古い伝統をひきずっているのだろうと考えた。ホントのところは20歳以上の男のたしなみだとのこと。しかし、たしなみとはいえ、20世紀も終わりに近づいた今ごろ、いまだに“寄らば撃つぞ”の姿勢を貫くには相当の理由があるに違いない。



事実、彼らの土地は世界地図の中にあって実に重要な位置を占めている。ペルシャ世界からインド世



カイバル峠ほかスレイマン山地の横断ルートと主要地域・都市

界へ入る道には、かの有名なカイバル峠がある。峠はアフガンとパキスタンの国境の北端にあつて、ヒマラヤ山脈がスレイマン山脈に変わる地点で、比高が最も小さい所に位置している。だから道路は曲がり重ねつつ標高をかせぐが、谷幅は結構広い。

峠を越えてさらに東へ進むとカシミールを経てインドに入る。しかし、この地点から陸地はインダス河に沿って南へさらに続くから、カイバル峠の南側でスレイマン山地を横断してアフガン南部からパンジャブに入るルートがあつて当然だと思われる。いちいち北の端にあるカイバル峠まで行ってからパンジャブへ入るといふのでは遠回りに過ぎるからである。

ルートは何本かあるが、炎熱のオマン海峡に沿う砂漠ルート以外はいずれもパンジャブ側に大きく落ち込むスレイマン山地を横断するから、200～300メートルを垂直に落ち込んだ絶壁を縫う道になる。それらの道はアレキサンダーの時代から大英帝国のペルシャ・アフガン・インド支配に至るまでの長い間、金の力か軍事力のいずれか、あるいは両方を併せもつ者が激しく行き交った東西交流の要衝であつた。

今もスレイマン山地一帯はパシュトン等少数部族が支配する地域なので、昔の通行者のうち力のあるものはこれらの部族をあるときは力でねじ伏せ、あるときは金で懐柔して通行してきたに違いない。部族の立場で見ると、腕づくで通過しようとする異部族・邪宗の侵略者から生業の放牧地を守るための強い戦いの連続だったのだろう。もちろん鴨が葱を背負って通ることもあつたはずだ。イギリスは植民地支配をしていた時代に、スレイマン山地の中央部フォト・ムンロという地域に砦を置いていたから、イギリスにとつても油断のならない相手だったようだ。

山岳少数部族はイスラムのしきたりと部族ごとの掟に従って生きている。自尊心が強く闘争心が旺盛な男中心の彼らの社会では、女性の地位はロバ1頭

\*元建設省土木研究所砂防部長

## 英国等と日本の植民地領有略史

年号	英国等	日本
1814	ネパール戦争：英軍グルカ族を攻撃（1816まで）	
1816		イギリス軍艦琉球へ来て通商を請う イギリス船しばしば浦賀来航
1823		シーボルト長崎在住
1844		オランダ国王日本に開国を進言
1849	グジャラートの戦—英軍全パンジャブ併合	
1854		対米英露安政和親条約
1867		江戸幕府大政奉還
1877	英領インド帝國成立	
1887	ロシア—イギリス間のアフガニスタン分割国境協定	
1893		日本朝鮮出兵
1894		日清戦争
1895	ロシア—イギリス—清国間バミール国境協定	下関条約（遼東半島台湾領有）
1904		日露戦争（南樺太獲得）
1907	イラン・アフガニスタン・チベットに関する英・露勢力圏協定	
1910		日韓併合

分だとのことであった。家にいて子育てと料理をやっておればいい安価な存在である。女は原則的に門外不出であるから、市場へ買い物に行くのも男の役割である。肝っ魂母さんが世に出るほどに女性の社会的地位が高くなるにはまだ歴史の時間が要るようだ。

掟に背くことになったり利害が対立する場合、長老を立てた話も可能であるが、最終的な解決は銃でつけるという。やはり、単なるたしなみで銃を持っているのでない。このような話を聞けば、「なんと男らしい」と感心する向きもあろう。しかし、実際は前に述べたように、異部族の往来と植民地支配に翻弄された歴史が自分達の力しか信用しないという閉鎖的な社会を作らせたに違いない。



完全なイギリスの植民地支配下にあったパンジャブの人々はひどい目に遭っている。イギリスは18世紀の産業革命で生み出した綿織物業の製品をインド人に買わせようとしたが、当時のパンジャブにはモスリンという絹の光沢をもった綿布があり、品質の良くない英国製の綿布の売れ行きはさっぱりだった。英国製の布の販売量を大きくするにはインド綿布が製造できないようにすればいい。そこでイギリスの綿織物業界が採った単純明快な手段は、インド人のモスリン織工の指をちょん切ることであった。インドはそれ以来、綿花を供給することだけを強い

られた。植民地制度がいかに伝統社会を破壊して住民を生存の危機に陥れたかがわかる。山岳少数民族はこのような悲惨を免れている。扱いにくく生産性の低い少数民族にはイギリス人もずいぶん苦勞させられたようだ。

多様な民族・部族が住み分けるインド世界の植民地統治でとくに苦勞した相手を次のような原則で表現している。要するにどうすれば西部辺境地域の部族を意のままに動かせるかである。

「シンド族は抑圧しろ。パンジャブ人は食わせておけばよい。パシュトン人には給金をしっかり払え、そしてパロチ族はその自尊心を損なわぬようにしろ」

ここでいう部族は、それぞれパキスタン南部、インドス河中流部、西部山岳地域、そしてイラン—アフガニスタン南部—パキスタン南西部を主要な居住域としている。私の相手はパシュトンの一支族である。

かなり乱暴な括り方ではあるが「江戸っ子」とか「肥後もっこす」といったわれわれの括り方に共通する対象認識である。このような国柄・土地柄・人柄の認識とその背景を理解することからプロジェクトは始まる。相手を正確に知らずして戦争の勝利はないが、企業活動も援助も己を知り相手を知らなければ成功はしない。まして、援助の場合は「あなたの幸せが私の幸せ」というレベルのオペレーションなのだから、「ここから先は君達が独り立ちしたま



「寄らば撃つぞ」プロジェクトサイトの男達

え」という持続性の確信が援助のシナリオに組み込まれていなければならないのだ。「われわれが（日本で）やっていることはいいことだから君達もやれよ」「遠隔地のデータはテレメーターで集めるのがよい」「防災技術を勉強すれば災害は防止できる」といった「手法や技術の無邪気な平行移動」では持続的な援助にはならない。



流域保全事業でまず、小さな砂防ダムを建設した。植生がない所に強度の大きい雨が降ると表面侵食が起きて土地の生産力が低下する。ダムは土壌の流亡を防ぐとともに、灌漑用の水の供給を目的にしている。暗渠に繋いだパイプが水を村の周辺の乾燥地に送る。さらに、ダムの建設と村への進入を容易にするために道路を作った。パイプはやぎが蹴躓いたり風に揺すられて台から落ちたりしてリンクが外れて送水できなくなる。道路の側溝を溢れた水が路面を侵食して車両の通行ができなくなる。

水も来なくなり道路も通れなくなると住民はさぞ困るだろうと思うが、誰も外れたパイプを繋ごうとしない。誰も路傍のガリーを埋めようとはしない。「君たちの村を良くしようとする事業を私達はやってるんだから、壊れた所を見つけたら君達で修理しろよ。壊れそうになったら補修しろよ」

「何言ってるんだ。あれはお前さん方が作ったものだから、お前さん方が維持管理・修理するのが当たり前だ」と村人は主張する。

「君達のため」という当方の思いやり・熱意が通じない。「俺達のための事業」、「出来たものは俺達の財産」という認識も、「この事業を成功させたら俺達の生活が良くなる」という希望も伝わらない。両者の考え方に大きなギャップがある。堂々めぐりで埒があかない。見解の対立は感情の対立になって村

への立ち入りが拒まれかねない雲行きになる。銃を向けられたらお仕舞だ。一方、放置すれば施設はさらに壊れる。なぜこんなに抜き差しならない膠着状態になったのか？

村人のテンションは上がってきてもう工事はしなくてもいいという。さらにおかしくなると腕づく（銃）で止められることになるだろう。

「なぜ、こと志と違って、こんなに抜き差しならない状態になったのか？」

「感謝されて当然なのに、なぜ感謝の気持ちが出てないんだ？」

「このまま互いに突っ張って立ち入り禁止になろうものなら何もできないじゃないか？」

「仕事をしに来て立ち入り禁止を言われ、無理をして銃で脅かされるようにでもなれば、折角の好意が台無しになる——すべてがぶち壊しになる——何も生まれない！」

と考えた。

村人の考えは、こうだ；

日本人はある日、勝手に来て勝手に工事を始めた。ダムもパイプも道路も彼らが勝手に作った。彼らが作ったものは彼らのもので俺達のモノではない。壊れたってそんなことは俺達は与かり知らないことだ。



ここまで考え方に違いがあると、どっちが正しいかと比較している場合ではない。比較という作業は、共通の土俵に入って共通の尺度をもって考えるからできることである。

われわれは、「日本国民の税金を使って」、「相手に喜ばれることをしている」と信じている。ところが、相手は喜んでいない。

この違いは一体何なんだ？

何がどうなってこうなったんだ？

と激しく悩む。

頭を冷やして考えてみた；

事業の説明や段取りを中央政府とパンジャブ州の担当者に説明した。中央や州の政府の担当者はとても喜んでくれた。この事業はこの国の広大な面積を占める乾燥地帯の農業の可能性を開き、農民は大きな希望を得て故郷に定着するだろう、と述べた。

われわれは、先が限られている工期をかなり気にして工事を急ぎ、重機をドカドカと持ち込んで、

「さあ工事を始めるぞオ」、「労務者には金を払うぞオ」といって工事を始めた。

工事を急いで、工区が別の部族のテリトリーに入っても同じ部族の労務者を使い続けた、出来高を上げるために簡単に賃金を上積みして無尽蔵に金があるような印象を与えた、村の顔役とおぼしき人物と話を付けて金を渡しておけば話は片付く……等々、肝心の受益者である住民を置き去りにして一方的にコトを運んだ——という印象を与える結果になったことが——そういう努力が不十分だったことが、彼らの自尊心を傷つけ、土地の秩序を乱し、人の土地で好き勝手に振る舞う奴等との不快感を与えたに違いない。

あとで判ったことだが、それらしき人物を顔役だと考えたのは当方の一人合点で、当人には何の権限もなく、渡した金は配られていなかった——もらった金を配るという発想がなかった！ し、その部族社会では意思決定を行う際には氏素性や貧富の格差は全く意味がなく、権利は完全に平等だとのこと。西欧社会が1940年代に夥しい流血の後になって世界人権宣言でようやく達成した原則が山の中の部族社会で何百年も前から当たり前のことだった！ 基本的人権という社会の価値観では日本を含む西欧文化人よりもはるかに先進的であった人達だったのだ。

慌てたパンジャブ州政府の仲介で話し合いを持ち、説明の不足を補い、住民の意見をもとにして現地のルールに則った施工計画で進めることにした。銃弾が飛ぶことは辛くも避けられた。

人々が社会を組み立て、人と付き合い、それぞれの生活を律していく方法には、地域の自然環境や歴史が色濃く反映されていて、単純に“人類みな兄弟”というわけにはいかない。信仰の対象を画や像にして崇拝するという行動が、敵対しさらに殺し合う原因になってきた。してはならないことや言ってはならないことが部族によって異なることや正反対であること——たとえば、子供の頭を撫ぜることや左手の使い方のように——も多い。美味しさや美しさという基本的な感覚も民族ごとにずいぶん違う。文化は相対的で絶対的なものではなく善し悪しはいえない。

このような事実は経験の積み重ねや社会学・文化人類学の分野の考察でかなり明らかになっていて、援助・協力の手順にも組み込まれるようになってきた。住民参加やオーナーシップ、自助努力、持続性

といった概念がそれである。援助・協力は、「援助・協力担当者が現場を引き揚げたら元の黙阿弥」というのでは何の役にも立たない。



援助・協力がきっかけになって、“担当者が帰ったあとも事業が住民に引き継がれて努力が続けられ、その結果住民が食えるようになり、さらに生活が豊かになって人口増加が環境容量内に止まる”というのが究極のシナリオだからである。援助・協力の目的は“貧乏人の子沢山”を脱却することと言い換えてもよい。国民のほとんどが農民という途上国の社会では、生産の基盤である土地は命である。土地を失った農民は存在価値を失うといっても言い過ぎではない現実が1993年の激甚災害を経験したネパールにある。パシュトン族のプロジェクト・サイトでも全く同じである。理由は何であれ、土地を失い存在価値をもたない農民の発言を誰も聞かない。中央であれ州であれ、政府にはそのような農民を救済する力も意思もない（なのになぜか他の国家を相手に戦争をする意思と能力はある）。

このような社会にあって、砂防事業は地形の安定を目的とするから、その上に乗っている農民の生活をも併せて安定させる効用を持つといえる。しかし、途上国が砂防を国家の「事業」とする段階にはインドネシアを除いては達してはいない。われわれは力のない国に、まだ「砂防事業を持つ段階に成熟していない」国に「砂防事業」を根付かせると錯覚してはいけない。「砂防事業」を持つことができるようになるまでに社会の成長と成熟のお手伝いをするのが当面の砂防・防災を通じた協力だと理解しなければならない。「砂防」はあってもそれを事業として国家が実施できるように力をつけるまでには、相当の努力が要るのである。言い換えると、砂防を「事業」にしているということは、国民の生命・財産の保全が国家の使命であると宣言して実行していることを意味する。国民の胃袋さえ満足に満たせない国には——日本もかつてはそうだった——不可能なことである。まずは、砂防は「食わせるための手段」であり「死なせないための手段」なのであり、それ以外のなにものでもないのである。このことを錯覚して自己満足の仕事をしてはいけないというのが、パシュトンの人々とのトラブルを通して考えたことであった。